

国際協力の理想に向けて多大な貢献 — 野口昇教授への献辞

理事長 島田 燐子

野口昇教授が本年3月をもって文京学院大学を退職されることになりました。先生は文京学院大学が2001年に外国語学部を創設するに際して、大きな柱として掲げた「国際協力」分野を牽引していただくべく就任をお願いいたしました。それまでのユネスコ本部、国連大学本部、ユネスコ北京事務所長等の輝かしいご経歴に加えて、着任後には日本ユネスコ協会連盟理事長に就任されましたが、ユネスコと大学の両方の役割を見事に果たされました。

ユネスコは国連の専門機関の一つですが、日本との関係が深く、新渡戸稲造博士が前身の委員会の運営を担われ、第二次大戦後、まだ占領下におかれていた日本を最初に加盟国として認めてくれたのがユネスコであったこともあり、わが国が力を入れてきた平和のための機関です。特に1960年代から国際協力による世界各地の文化遺産を保護する活動が始まり、「世界遺産条約」が採択されて、有形、無形の「世界遺産」の保護に先生は係ってこられました。また、親善大使の平山郁夫氏とともに熱心に活動をされました。

同時に「教育」を受けられない人々への「識字教育」をすすめるために献金によって小さな学校を僻地に建設して識字教育を行う「寺子屋事業」も日本ユネスコ協会連盟は熱心に推進されてこられました。国際会議では何回も議長や司会を務められました。

先生の本学在任中の顕著な実績を述べさせていただくと、第一にこうした国際文化協力の只中に身を置かれて、最新の動向を踏まえて授業やスタディツアーを真摯に実践されました。

教育者としての熱い情熱と人を慈しむ深い心を傾けられて「国際関係論」「国際文化協力」「Conference English」「国際連携プログラム」「地域研究」等の学部、大学院の授業を担当され、ゼミナールでも多くの学生を育ててくださいました。大学院では修士論文、学部のゼミナールでは卒業論文の指導に先生は惜みなく時間を注いでおられました。それも12月から1月初めがピークとなりますので、先生は正月もなく新年早々、夜遅くまで指導され、秋の文京祭ではゼミナールの研究発表を毎年実施されておられます。

また、毎年3月にはカンボジアへのフィールドワークの引率もしていただき、頭が下がりました。こうした先生のお人柄を慕って、卒業生たちが社会人となってからも先生を訪ねてこられて近況を報告したり助言を仰いだりしている姿を数多く見受けます。また、国際協力関係の仕事に就いた人もおり、先生の教育者としての優れたご指導の成果で、心から御礼を申し上げる次第です。

第二には、副学長・国際交流センター長として学内の国際交流委員会をまとめ各国の大学との提携・連携にご尽力くださったことです。本学は大学の規模に比して多くの提携校を持ち様々

な国際交流を展開しております。新しい関係を築くことも大変ですが、交流を維持していくには、かなりの気遣いとエネルギーを注いでいかななくてはなりません。本学の国際交流が成功している陰には先生のリーダーシップと細やかな心遣いがあった故と申せましょう。サーズの流行の年、多くの大学が海外へ学生を送ることを中止しましたが、野口先生は毅然と「むしろ受け入れる側が恐れてもよいのに、いらっしゃいと言っているのですよ」ときちんと判断されて送り出しを主張されました。まさに先生そのものが「国際基準」と私は考え、先生の判断に負うところが大きかったことを申し添えたいと思います。そして、今後とも先生にお助けいただきたいと願っております。

第三に、先生はご自身の研究分野を様々な機会に発表されておられることです。90年代以降を取り上げてみても、「ユネスコに見る南北問題」、「国際組織としてのユネスコ」、「ユネスコの50年を振り返って」、「東アジアにおけるユネスコの事業」、「北朝鮮の友好芸術祭と高句麗古墳」「ユネスコ創設60周年シンポジウム (パリ)」等があります。2004の本学創立80周年記念論文集では、サミュエル・ハンチントン氏の文明の衝突とジョセフ・ナイ氏のソフト・パワー論を基に、青木保氏の多文化世界への考えを紹介され、文明間の対話の大切さを主張されました。私どもの大学も、まさに先生の目指す多文化共生に向けて教育を展開していると申せましょう。そのような意味でも、多大な貢献をしていただいたと感謝いたしております。

「新・文明の旅」の実行に際しても、各大使や大使館への交渉にもご尽力くださいました。グローバル化社会の中での先生の重みを感じ、感謝に堪えません。

野口昇先生と文京学院大学の絆は深く強いものがあります。これからもぜひご指導いただけますことをお願いするとともに、先生の益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。先生、有難うございました。

2012年12月6日